

ノルベルト・ディットマー教授講演会

„Syntax, Semantik, Pragmatik des kausalen Konnektors *weil* im Berliner ‚Wendekorpus‘ der 90er Jahre“

星井牧子

「従属の接続詞は副文を導き、副文中での動詞の定型は文末に置かれる。」接続詞 *weil* に導かれる副文の定型後置は、私たちがドイツ語を学ぶとき、あるいは教えるときに、ドイツ語に特有の現象としてとりあげる必須の文法事項であり、実際、独検や各種の問題集を見ても、*weil* と *denn*, *da* など理由をあらわす接続詞の使い分けは、一つのポイントとして取り上げられていることが多い。ドイツ語を学び始めたときに、この定型後置はなんとかクリアすべき「やっかい」な（あるいは「不思議」な？）文法事項と感じる学習者も多いのではないだろうか？ その一方で、ドイツ語を母語とする人たち同士の会話の中では、*weil* に導かれる文では必ずしも定型が後置されるわけではなく、ドイツで出版された最近の教材には、Max Hueber Verlag の Tangram 1B のように、「日常の話し言葉では *weil* や *obwohl* の後にポーズが置かれ、動詞の定型が第 2 位に来ることがあるが、書き言葉では使われない」ことに関する言及が見られるものもある。それでは、実際の *weil* の使用状況はどうなっているのだろうか？ 2003 年 10 月 15 日に開催されたノルベルト・ディットマー教授（ベルリン自由大学）の講演会 „Syntax, Semantik, Pragmatik des kausalen Konnektors *weil* im Berliner ‚Wendekorpus‘ der 90er Jahre“ では、東西ベルリン市民の発話を調査したプロジェクトデータをもとに、*weil* の使用が統語的、意味的、語用論的観点から論じられた。

ノルベルト・ディットマー教授は、2003 年度日本独文学会秋季学会・第 2 回国際会議（総合テーマ „Konzepte der Landschaft in Ost und West“）の招待講師として来日された。ディットマー教授は社会言語学の視点から話し言葉 (*gesprochene Sprache*) の分析をすすめておられ、研究対象にはドイツ語母語話者の発話だけでなく、ドイツ語を母語としない話者の発話（第二言語習得）も含まれている。後者に関しては、これまでに HPD プロジェクト（1970 年代）、ESF プロジェクト、P-Moll プロジェクト（1980 年代）など、第二言語としてのドイツ語習得に関する多くのプロジェクトを手がけておられる。一方、今回の講演での分析・考察の対象となったデータは、東西ベルリン在住のドイツ語母語話者の話し言葉である。このプロジェクトでは、1993 年秋から 1996 年 3 月にかけて、31 名の東ベルリン市民および 25 名の西ベルリン市民にナラティブ・インタビュー法を用い、1989 年 9 月 11 日の出来事、感情、考えたことについて語ってもらうという手法をとっている (vgl. Dittmar/Bredel 1999)。講演はその中で使用されている *weil* を含む発話の特徴に焦点をあてた考察であった。

話し言葉に見られる weil の定型第 2 位 (Verb₂) の例は 1950 年代から南ドイツで観察されている。Weil+Verb₂ は、東ベルリンの出身者からは「典型的な Wessi ことば」と捉えられる傾向にあるようだが (vgl. Dittmar/Bredel 1999: 165), 実際にデータに見られる weil の位置を比較すると、東のデータの場合、511 例のうち、weil+定型後置 (Verb_E) は 341 例、weil+Verb₂ は 154 例、それに対し、西のデータでは 216 例のうち、weil+Verb_E が 146 例、weil+Verb₂ は 65 例と、傾向にそれほど大きな違いはないことが紹介された。また、weil+Verb₂ の場合、nämlich、(ルール地方、ベルリンなどで使用される) ebend などの Partikel、あるいは挿入句とともに用いられている例がいくつか提示された。プロソディーと語順との関係については、前述のとおり、一般的には「weil の後にポーズが置かれると定型第 2 位となる」と言われるが、東の weil+Verb₂ 154 例のうち、ポーズのあるものは 36 例 (23%)、西の weil+Verb₂ 65 例のうち 11 例 (17%) と、weil+Verb₂ が、一般に考えられているように必ずしもポーズを伴うとはいえないことが指摘された。また、データの中では、denn, da を伴う発話との比較も行われ、ベルリンでは 1960 年代から、denn が減少し、weil が増加していること、da の使用は主に書き言葉に見られることも紹介された。東西ドイツの言語使用については、一般的には各言語共同体に特徴が見られると言われているが、今回の講演で紹介のあったコーパスでは、東西ベルリンでの weil の使用に関しては、それほど大きな相違が見られないことも指摘された。講演後は参加者から、ドイツ語教育との関連、歴史言語学の視点などから、示唆に富む質問が出され、活発な質疑応答が行われた。

なお、今回の講演で紹介された東西ベルリンの発話データについては、Dittmar/Bredel (1999), *Die Sprachmauer. Die Verarbeitung der Wende und ihrer Folgen in Gesprächen mit Ost- und Westberlinerinnen*. Weidler Buchverlag: Berlin. で、詳しく紹介されている。また、ディットマー教授には、話し言葉の文字変換 (トランスクリプション) に関する著書もある: Dittmar, Norbert (2002), *Transkription. Ein Leitfaden mit Aufgaben für Studenten, Forscher und Laien*, Leske+Budrich: Berlin. どちらも、本の中で紹介されているデータのオリジナル音声とトランスクリプトはディットマー教授のホームページ (<http://userpage.fu-berlin.de/~nordit/HP/>) で閲覧することができる。ご関心のある方は、一度、Dittmar 教授のホームページをご参照いただきたい。